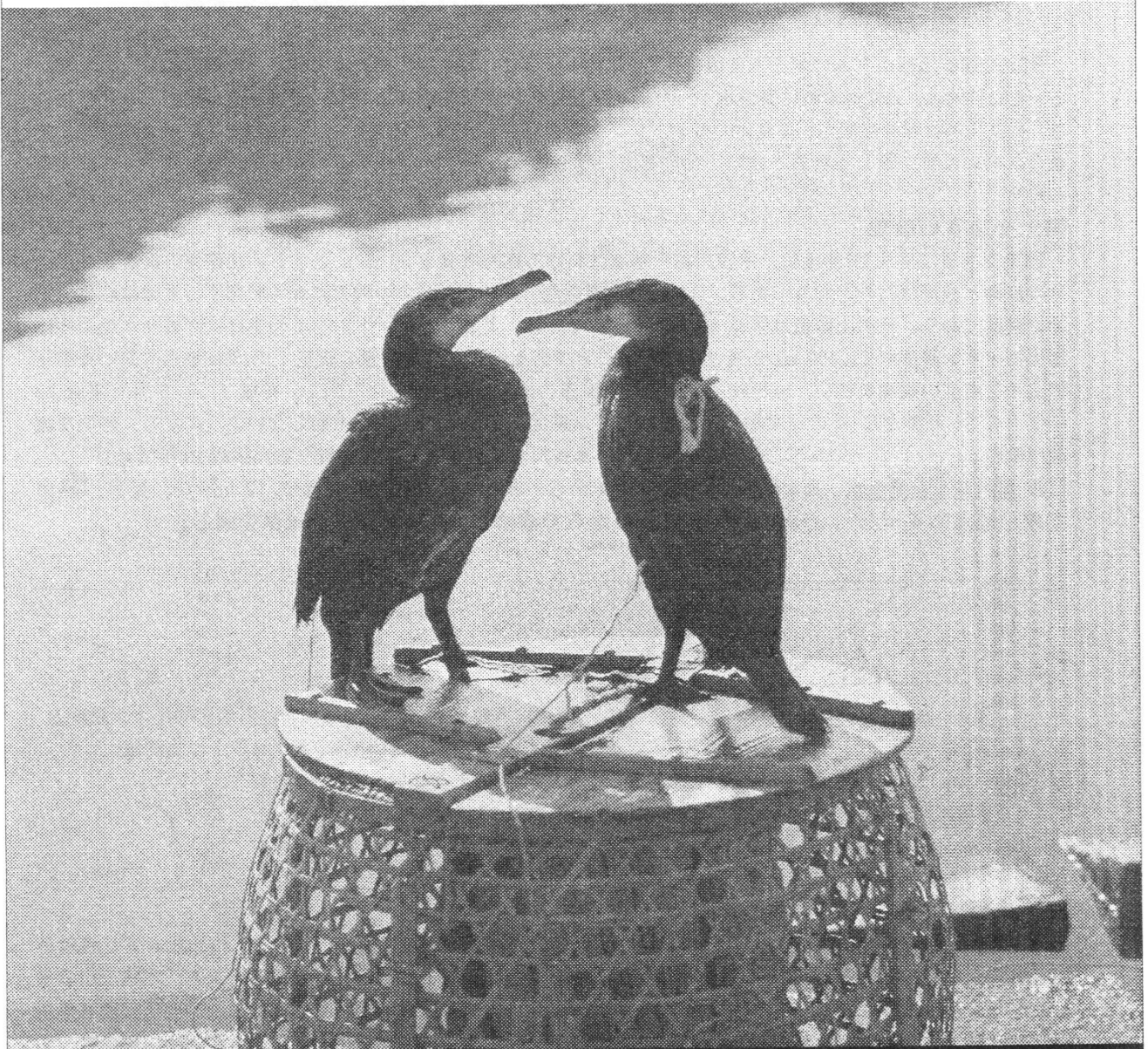
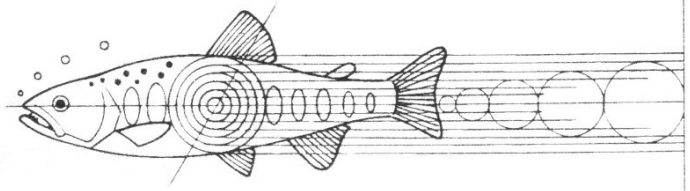


news

長良川市民学習会ニュース



長良川に徳山ダムの水はいらない。

No.2
2008年6月3日

表紙・目次 写真:芝野将光……………P 1	導水路建設をめぐる情勢と活動報告……………6・7
ヤマトシジミに導水路は必要か……………P2・3	新聞記事切抜き・学習会日記……………P8・9・10
ありもしない水需要と信じられない財政負担 ……………P4・5	内ヶ谷ダム(郡上市)の工事が進む……………P11
	校歌に歌われた長良川、事務局より……………P12

ヤマトシジミに導水路は必要か

山内克典（岐阜大学名誉教授）

国土交通省は徳山ダムの水を木曾川や長良川に流すために、890億円をかけて導水路を建設しようとしている。主な目的は、異常渇水時に緊急水16 m³/sを放流して木曾川や長良川の河川環境を改善することだとされる。長良川河口堰を建設し、長良川のヤマトシジミを死滅させた国土交通省が、今回木曾川のヤマトシジミを救うために巨費を投じる計画とはいったいどういうものなのか？ほんとうにヤマトシジミを救うことになるのか？

国土交通省の論理

国土交通省は平成19年度に、木曾川成戸地点における維持流量を50 m³/sとする河川整備方針を定めた。その根拠と施策は次のとおりである。(1) 必要水理条件：ヤマトシジミの瀕死に最も影響する要因は塩化物イオン濃度であり、その上限値は概ね11,600 mg/ℓである。よって、ヤマトシジミの生存に必要な水理条件は塩化物イオン濃度が11,600 mg/ℓを上回らないことである。(2) 必要流量の設定：13.8km地点において塩化物イオン濃度の観測を行い、塩化物イオン濃度と流量の関係式を作成した（図1、平成17年5月～平成18年3月に25回測定）。その結果から、塩化物イオン濃度が11,600 mg/ℓを上回らないようにする、必要な流量は概ね50 m³/s以上であることを確認した。（「木曾川水系河川整備基本方針（案）平成19年7月」）

(3) 維持流量と緊急水：異常渇水時には徳山ダムからの導水により木曾川坂祝に12 m³/s、長良川経由で成戸地点に4 m³/s、合計16 m³/sを成戸地点で補給して、維持流量の確保を図る。

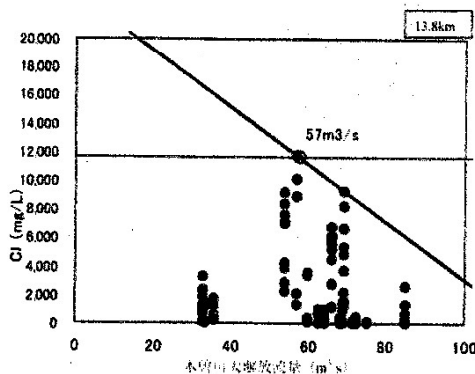


図1. 木曾川13.8 km地点における塩化物イオン濃度と成戸地点流量の関係。各プロットは実測値。（国土交通省、平成19年）。

維持流量設定上の問題点

1) 塩化物イオン濃度が11,600 mg/ℓを上回らないという条件設定は間違っている。塩化物イオン濃度が16,000 mg/ℓの塩水で3日間飼育してもヤマトシジミの死亡は0という実験結果もある。実際、木曾三川のヤマトシジミの高密度生息域にも、しばしば15,000 mg/ℓ以上の高塩分水が遡上している。2) 国土交通省が用いた塩化物イオン濃度と流量の関係式（図1の直線）は事実には合わない。例えば、流量0のとき、塩化物イオン濃度は、海水の塩化物イオン濃度約18,000 mg/ℓを大きく上回る23,000 mg/ℓほどになってしまう。

平成6年異常渇水時のヤマトシジミ

史上まれな異常渇水のおきた平成6年（1994年）は長良川河口堰運用の前年であった。この年、建設省・水資源開発公団（当時）は、数十億円ともいわれる巨費を投じて「長良川河口堰調査」を行った。ヤマトシジミは、長良川のみならず木曾川・揖斐川においても詳しく調査された。それらの結果から見ると、木曾川9km地点あたりを境にして、下流側では局所的にヤマトシジミの斃死が起きたが、上流側ではほとんど影響がなかったと推定できる。斃死の原因は、塩分濃度が高くなったというよりは（塩分濃度は冬期の渇水期よりも低か

った)、伊勢湾から遡上した貧酸素水に因るもの(酸欠)と考えられる。

「緊急水」の効果の検討

16 m³/s の「緊急水」は木曾川の塩分濃度を薄めることができるだろうか。問題となるのは、高濃度の塩分が遡上する塩水クサビ形成時の底層水の塩分濃度である。塩水クサビが形成される時には、上流から流れてくる河川水は遡上した底層の海水とあまり混じり合うことなく、表層を流れる。したがって、「緊急水」(河川水)も塩水クサビの上を流れるので、底層水の塩分濃度はあまり低下しない。図2は1995年9月の木曾川8.7 km地点における塩化物イオン濃度と笠松地点の流量を示している。9月15、16日に、笠松地点の流量は50 m³/s以下から100、200 m³/s以上に増加したが、8.7 km地点の塩化物イオン濃度はこれらの流量でも増加し続け、17日の12:00には塩化物イオン濃度14,200 mg/lを記録した。その直後に出水(日平均783 m³/s)は一時的に塩水を一掃したが、2日後の19日には流量が200 m³/sあったにもかかわらず塩化物イオン濃度はまた15,000mg/l以上に増加している。つまり、笠松地点の流量100~200 m³/s程度では塩水クサビの形成パターンや底層の塩化物イオン濃度にほとんど影響しないことを示している。したがって、16 m³/s程度の緊急水が大きな効果を上げるとは考えられない。

まとめ

国土交通省の行った大規模な調査は、平成6年に異常渇水を原因としてヤマトシジミが異常に斃死したという事に疑問を投げかける結果であった。また、徳山ダムからの緊急水16 m³/sが底層の塩化物イオン濃度を薄める効果はほとんどなく、ヤマトシジミを救うことはできない。連絡導水路計画は根本から考え直すべきであろう。

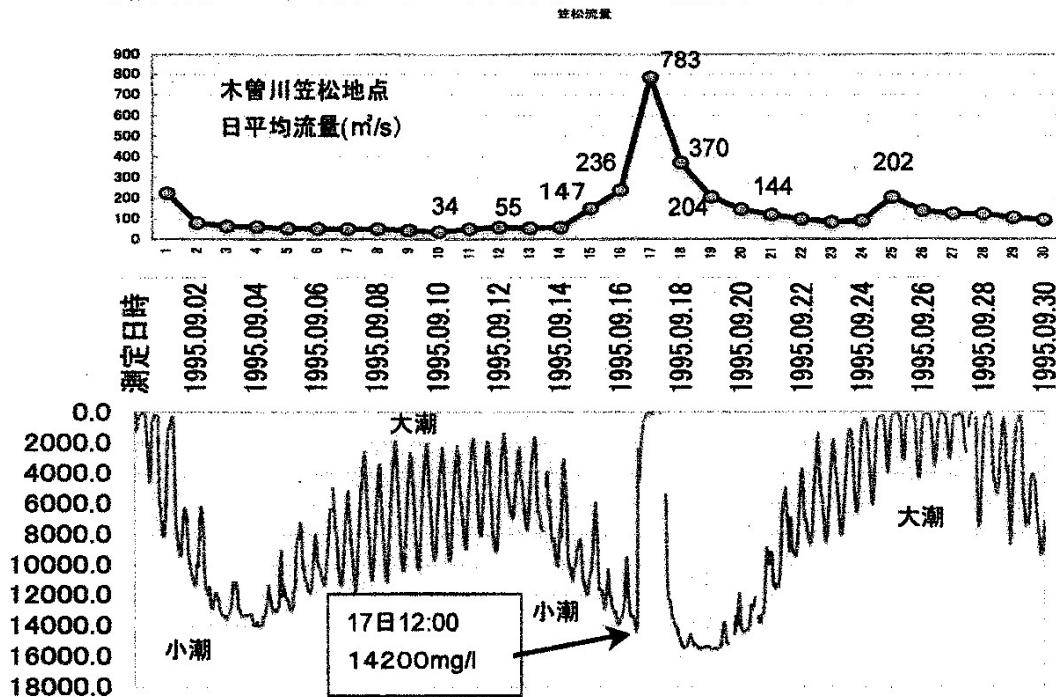


図2. 渇水時における「緊急水」放流の効果の検討

笠松流量は、木曾川大堰湛水域のすぐ上流、笠松観測所で記録されたものである。木曾川大堰地点までに木曾川用水など37.46 m³/sの水利権があり、成戸流量とは異なる。流量のデータは国土交通省の開示情報、塩化物イオン濃度のグラフは建設省・水資源開発公団「長良川河口堰モニタリング調査」のデータから作図。

ありもしない水需要と、信じられない財政負担

富樫幸一（岐阜大学地域科学部）

徳山ダムはこの3月にほぼ完成した。3月には慌ただしく、木曾川水系流域委員会が「連絡導水路」を盛り込んだ「河川整備計画」を承認し、国土審議会水資源部会木曾川分科会も水資源開発基本計画の部分変更を認めてしまった。徳山ダムが本当に必要なものだったら、導水路ももっと早くから計画され、事業化されたはずである。導水路を含む建設費の償還（借金の返済）を考えると、本当は10年以内に全部の需要（料金で回収）がないと大変なことになる。 どうもこうした「常識」が通じなかったダムなのである。

水需要の実態と計画

木曾川水系の都市用水（工水・上水）の需要は1983年（4半世紀前）に完成した木曾川総合用水（木曾川大堰などと岩屋ダム）で一応満たされ、開発水量40 m³/sの約半分が未利用のままである。しかも、需要は工水のみならず水道も減少に向かっている。これがまさに「実態」である。この事業費の償還（23年ローン）は2006年に終了した。未利用の分は税金で払わざるを得なかったのだが、これに懲りずに長良川河口堰を完成させ、徳山ダムまで作ってしまった。この徳山ダムで開発された水20 m³/sを長良川、木曾川に導水する、それが「徳山ダム導水路計画」である。

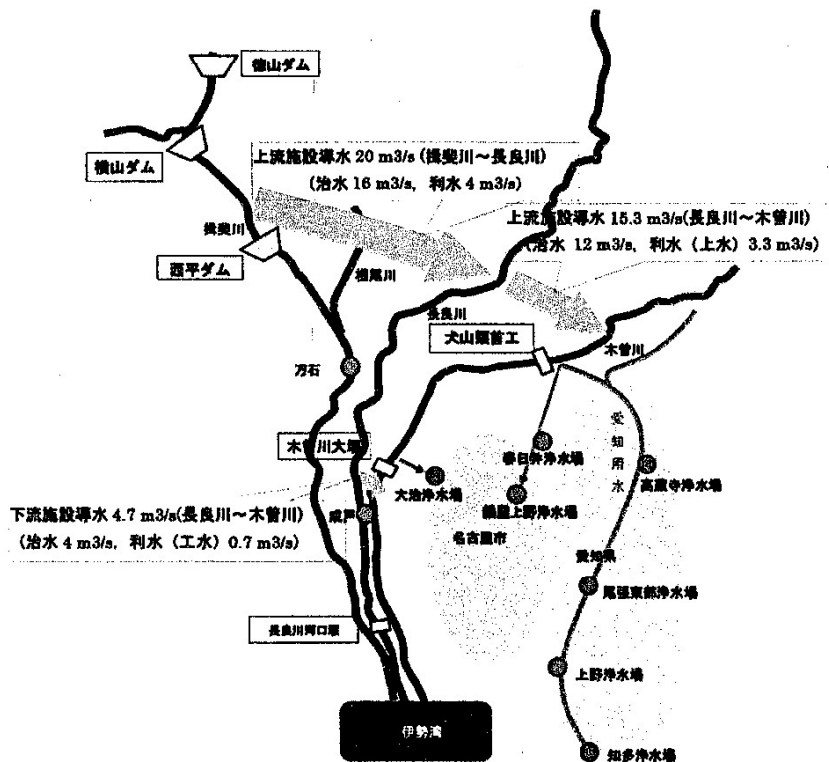


図6 木曾川水系連絡導水路の概要

木曾川水系連絡導水路事業の水道事業に係る事業評価（事前評価）平成19年8月22日 独立行政法人水資源機構より

名古屋市の負担

名古屋市は徳山ダムで得た工水 0.7 m³/s と上水 1.0 m³/s を、長良川、木曾川経由で木曾川大堰から取水する。この計画のうち、名古屋市営工業用水分の 0.7 m³/s は、これまで工業用水道が水道用の大治浄水場の「作業排水」として取っていたものを、無理やり置き換えるだけである。しかし、工業用水道会計から徳山ダムのお金は払えないので、上水道の会計から払う。工業用水の需要が発生したかのように見せかけるために、さらに導水路に膨大なお金を浪費する計画である。上水の 1.0 m³/s 分の費用はどうするのか？木曾川総合用水の償還（年 10.8 億円）が終わっているのに、徳山ダム（11.2 億円）の分は料金を上げなくても払えると議会で説明して通ってしまった。合理化やこれからの老朽施設の維持更新を考えると、本当はそんな余裕はない。

愛知県と導水路計画

徳山ダムの愛知県分は上水 2.3 m³/s である。しかし、需要が停滞、減少気味なので浄水設備を拡張する予定はない。常時使わない（不要な）水は、たとえダムが完成していても「公水を占有」する新規の水利権は国から許可されない。だから、普段は使えない水である。河川管理者が国土交通大臣だといっても、なんでもありではないのである。名古屋市とともに、木曾川依存から、揖斐川、さらに余している河口堰の水すら、導水路に併せて「使えるように」したいと言っているが、元のダムや堰の水がいくらあっても末端の設備がないとダメである。「使えるようになるかもしれない」という理屈で導水路などの不要な支出をしようとしている。

さらに理屈の通らない岐阜県

岐阜県は西濃地域の用水として 2.6 m³/s（工水 1.4 m³/s、上水 1.2 m³/s）の権利を得た。「東濃の渇水」対策と、どこに理屈（水？）が通るのか分からないことを言っているようだが、もともと木曾川下流の環境改善（治水の一つ）のためなので東濃には縁がない。縁のある西濃では導水路の「ど」の字も出てこない。安い足下の地下水（3 円/m³くらい）で足りているから当然である。地下水汚染や地盤沈下から、ユーザーの確保をと県は述べている。しかし、値段と水量を説明しないと、契約は出来ない。筆者の試算では、あまりにも高くなる料金（100 円/m³を超える）を怖くて口に出せないはずである。財政が危機的な岐阜県なのに、木曾川総合用水に続いて、またもや県費で払っていきはめになる。

導水路計画を合理化するための「渇水対策」

異常渇水時に（10～20 年に一辺だけ？）流す緊急水 16 m³/s は渇水対策という名目の治水事業である。これは、徳山ダムの事業費が 2500 億円から 3500 億円（最終的には 3351 億円）に増えたときに、利水側の負担を軽減するために本来は利水事業であったものを国の補助率の高い治水事業（7 割補助）にするために生まれた方便である。「渇水対策」といっても取水できる水ではない。本当の異常渇水の際は、1994 年の渇水時のように農業用水と調整すればいいのだが、流域委員会では実績もあって効果の大きいこの選択肢を、ダムと導水路が必要と言いつけるために意図的に外した。

水資源白書に逆行する木曾川水系の渇水対策

平成 19 年度の『水資源白書』は「渇水リスクに対し、これまでの水資源開発による量的な充足を優先する方策（つまり徳山ダムのように、筆者注）から、限られた水資源を有効に利用する総合的なマネジメントへ」の転換を説いている。淀川水系流域委員会も「節度ある水需要」を掲げて、「新たな施設の建設によらない対応（ソフトソリューション）に転換」と、国に先んじて利水ダムからの撤退を求めている。こうした流れに逆らって異常渇水と利水安全度の低下からダムの必要性を説くことは、木曾川発で全国的に使われるようになった（レ）トリックである。今度の導水路計画は通用させてはならない「非常識」なのである。

導水路建設をめぐる情勢と「市民学習会」の活動報告

長良川市民学習会事務局長 武藤 仁

徳山ダム建設から導水路計画

「木曽川水系連絡導水路」は、徳山ダムに貯めた水を木曽川、長良川に導水しようとするものです。その徳山ダムの「完成」放流をめぐり、5月連休前後マスコミは関連ニュースを連日賑々しく報道しました。使うアテのないこの水、何の名目でどう流すのか？溜まりに溜まった巨額の借金、誰が払っていくのか？

古田岐阜県知事は記者会見で「償還は大きな財政負担」「利用者開拓急ぐ」(4/22)と述べています。苦渋に満ちた不気味な発言です。岐阜県はまったく使う計画がない上水・工水分として今後23年間で529億円の巨額を返済しなければなりません。当面は岐阜県の一般会計から水資源機構に直払いをします。しかし、これは企業会計の原則をとる法律から外れています。いずれ「どうにかしなければならぬ」のです。

【 悲劇の徳山ダムから導水路へ 】

1973(昭 48)木曽川水系水資源総合開発計画変更の中で徳山ダム建設決定
1988(平 1)域外移転 466 世帯すべてについて移転契約完了
1995(平 7)徳山ダム建設事業審議委員会設置
1996(平 8)名古屋市 3m³/秒の水利権返上
2000(平 12)ダム本体着工
2003(平 15)水資源開発公団建設費増額発表
2004(平 16)3県1市一斉に部分撤退表明
「徳山ダムに係る導水路検討会」設置
2007(平 19)導水路「上流分割案」で3県1市合意
2008(平 20)試験放流開始

さて、この徳山ダム事業、スタート間もなくから歓迎されることなく今日まで不幸と悲劇を重ねる経過でした。建設決定は1973年(昭和48年)木曽川水系水資源開発計画の中でされました。時あたかも「オイルショック」の年＝高度成長経済がストップした年です。水需要の伸びの目途はなくなりました。にもかかわらず何も見直されることなく計画は進み、徳山村全村466世帯がふるさとを追い出されるという最大の悲劇を生みました。

ダム建設への批判の高まりの中で、徳山ダム建設事業審議委員会が設置され、名古屋市上水の水利権一部返上などの動きがありました。しかし、当時の梶原岐阜県知事は徳山ダム事業推

進を強硬に主張し、国は返上分を「異常渇水対策」とすることで「早期完成」結論となりました。

完成が近づいた2003年、水資源開発公団は突如事業費1,010億円増額を提示しました。岐阜県、愛知県、名古屋市には徳山ダムの水を使うアテは無く、申し合わせたように約半分の水利権を返上しました。しかし、本体着工という既成事実を押されて、河川法上の手続もとらずに、返上分は税金負担の「治水」とされ、住民不在のまま960億円増額で決着しました。つまり2県1市の負担額は大幅に増額され、今日の「歴史的」放流に至りました。

導水路計画と「長良川市民学習会」の追及

木曽川水系連絡導水路計画は、この徳山ダム事業の正当化のために浮上したもので、決して流域住民の要望で作られたものではありません。「長良川に徳山ダムの水を流す」ことを知った市民が一斉に反発するのも当然です。

国が情報を隠して事業を進めようとする中、私たち市民学習会は昨年12月活動を立ち上げ私たちが知りうる情報を市民に広げました。そうした中、岐阜市や岐阜県がまともな情報を持たずに

事業の進捗を黙認する無責任な姿勢も浮き彫りになりました。

市民学習会は市民が「恐れていること」「知りたいこと」を前面に押し立て、4月22日と5月19日に事業主体である国土交通省（木曾川上流河川事務所及び中部地方整備局）に要請行動を行いました。その結果、驚くべきことが明らかになりました。

- ① 長良川に徳山ダムの水を求める自治体や団体は無かった。長良川への導水の提案は、長良川の「異常洪水時の危機管理対策」としての国交省の行政判断である。
- ② 最大の危機であった平成6年洪水で環境被害の記録は無い。「異常洪水時の危機管理対策」とは、平6洪水を超える「将来あるかもしれない仮想の洪水」である。

市民感覚はもちろん、これまでの行政の論理からさえ外れる回答です。矛盾が表面化し市民の情報公開の声が高まる中で、国交省側はあらたな「対策」を小出しし始めています。

- ① これまで非公開の「木曾川水系連絡導水路環境検討会」を4月24日の第4回検討会より一般市民にも公開。
- ② 市民にははっきりさせなかった「常時毎秒0.7m³」の放流問題について、伊自良川など下流支川で検討することを突然提案。
- ③ 「地元説明会」を7市町で、「河川ふれあいセミナー」を岐阜、一宮、桑名で開催する。しかし、前者は自治会長や地権者に限ったものであり、後者は河川整備計画を看板にしたもので、市民が求めた「一般市民に開かれた導水路事業説明会」とかけ離れたものです。

長良川に徳山ダムの水は流させません

「誰も求めなかった長良川への導水」「ありえない長良川の洪水被害」、それなのになぜ導水？長良川への導水の提案は、昨年8月の第7回徳山ダムに係る導水路検討会で議論されそれを受け3県1市の合意がなされました。市民学習会は、検討会での論議内容が疑問解明の鍵になると考え「議事録の公開」を求めました。ところが国交省は「議事録は存在しない」と回答しました。

国民が求めてもいない事業に890億円の国民負担する検討会の議事録がないとは、一体どういうことでしょうか？なぜ、ここまで隠し続け、工事着工を急ぐのでしょうか。目的が不明のままの着工は、徳山ダム建設事業の悲劇を重ねるだけです。

導水路により長良川に常時流される毎秒0.7m³は名古屋市の工業用水に、木曾川上流のダムがピンチとなる洪水時に流す毎秒4.0m³は木曾川下流のヤマトシジミの被害を防ぐためとされるもの（96年に名古屋市上水が要らないと返上した分の一部）です。需要を減らし徳山ダム建設費償還を自力でできない名古屋市工業用水事業にこの水はまったく要りません。科学的根拠が無いヤマトシジミ被害を理由にした水は必要ありません。この問題を曖昧にしてはなりません。すでに、この合わせた毎秒4.7m³を流す下流施設と連携する新たな事業の準備が始まっているのです。「長良川河口堰の水利用に係る影響検討委員会（仮称）」がそれです。これによると、未利用となっている河口堰の名古屋市上水分毎秒2.0m³と愛知県上水分（要らなくなった工水を県民に押し付けたもの）毎秒4.52m³をこの連携する施設で流そうというのです。名古屋市上下水道局は60億円の追加建設費を試算しています。合理的目的なき河川事業をいったん許せば、あらゆる河川で歯止めはなくなります。**ストップ!**

私たち市民学習会は、6月岐阜市議会に「岐阜市が国に事業の説明責任を求める」請願を行うとともに、9月岐阜県議会に向け「上流分割案合意の白紙撤回」請願・署名運動を展開します。

新聞記事・学習会日記



計画の内容や必要性について質問するメンバー
＝岐阜市志留町、木曾川上流河川事務所

導水路計画で
市民と対話を
市民団体が木曾川
上流事務所に要請
徳山ダム、揖斐郡指
る市民グループ一長良

- 4月22日 国交省 木曾川上流河川事務所へ要請行動
- 4月24日 国交省 第4回木曾川水系連絡導水路環境
検討委員会
☆徳山ダム試験放流開始
- 4月29日 長良川中流域現地調査
- 5月05日 ☆徳山ダム試験放流終了
- 5月10日 「鶴飼開き」にあたり、見解表明を記者発表
- 5月11日 内ヶ谷ダム予定地(亀尾島川)探索会に参加
- 5月19日 国交省 木曾川上流河川事務所へ要請行動
- 5月30日 岐阜市議会請願各派へ申入れ
- 6月3日 第3回市民学習会

開きたいなら、この話し、
理解を求めた。

計画の内容や必要性について質問するメンバー
＝岐阜市志留町、木曾川上流河川事務所

計画の内容や必要性について質問するメンバー
＝岐阜市志留町、木曾川上流河川事務所

計画の内容や必要性について質問するメンバー
＝岐阜市志留町、木曾川上流河川事務所

徳山ダム、揖斐郡指
る市民グループ一長良

徳山ダム、揖斐郡指
る市民グループ一長良

徳山ダム、揖斐郡指
る市民グループ一長良

徳山ダム、揖斐郡指
る市民グループ一長良

08年4月23日 岐阜新聞

ユーザーの確定必要

徳山ダム 償還の財源で知事

五月上旬に本格運用
が始まる揖斐川町の徳
山ダムについて、古田
知事は二十二日の定
例会見で「本年度から
スタートする償還の財
源は、当初は（水を使
う）ユーザーからの利
用料を充てるつもりだ
ったが、まだ定まって
おらず財政的には負担
となる」と述べ、水を
買ってもらう下流域
の自治体や企業を確定
させていく努力が必要
との見方を示した。

また、ダムの水を木
曾川水系で使えるよう
にする連絡導水路事業
について「十分な環境
対策の検討の上」に立っ

08年4月23日 中日新聞

ることは、規模や時
期などは未定とした。
連絡導水路は揖斐川
上流の徳山ダムにため
た水を地下トンネルを
通して長良川や木曾川
に放流。国は一九九四
年のような渇水時の水
質改善などを効果に挙
げている。

市民学習会は環境に
悪影響を及ぼすなどと
して長良川への放流に
反対。実行委は九四年
に長良川の魚にどれだ
け被害が出たかを示す
資料の有無をたじた
が、同事務所は「デー
タや報告書はない」と
答えた。

市民学習会一実行委員
代表、粕谷志郎岐阜
大教授は二十二日、岐
阜市の国土交通省木曾
川上流河川事務所を訪
れ、公開説明会や対話
集会の開催などを求め
た。鈴木正典副所長は
「開催を検討してい

市民学習会一実行委員
代表、粕谷志郎岐阜
大教授は二十二日、岐
阜市の国土交通省木曾
川上流河川事務所を訪
れ、公開説明会や対話
集会の開催などを求め
た。鈴木正典副所長は
「開催を検討してい

導水路建設の根拠とも言える「94年大渇水(平6渇水とも)」に関する調査報告書自体が存在しないとの回答でした。また2-3Pの「ヤマトシジミに導水路は必要か」に記載されている通り、ヤマトシジミに関する論拠も希薄と言わざるを得ない。これは5月20日に行われた、揖斐川町での住民説明会(自治会長・地権者対象)での資料でも「H6渇水被害」と題し新聞記事を記載しているが、それ以上の調査資料は記載が無い。

この理解しがたい導水路問題を取り上げた本が出版されました。

題名：『水資源計画の欺瞞－木曾川水系連絡導水路計画の問題点－』

著者：伊藤達也 発行：(株)ユニテ 価格：1,500円＋税

徳山ダム導水路常時放流

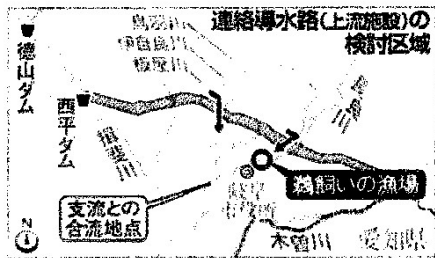
支流から長良川本流へ

徳山ダム（岐阜県揖斐郡木曾町）の水を木曾川、長良川に流す連絡導水路事業で、国土交通省中部地方整備局（中部地整）は二十四日、長良川に常時放流する毎秒〇・七リットルの水について、支流から長良川本流に流す案を検討することを明らかにした。

徳山ダム（岐阜県揖斐郡木曾町）の水を木曾川、長良川に流す連絡導水路事業で、国土交通省中部地方整備局（中部地整）は二十四日、長良川に常時放流する毎秒〇・七リットルの水について、支流から長良川本流に流す案を検討することを明らかにした。

長良川ではなく、支流の伊自良川ならば問題なく良いのか。国交省中部地方整備局からは、この事業計画は民意によるところではなく「行政判断」との言質も得ています。旧来型の公共事業ではなく、住民との合意形成が必要なのではないでしょうか。

4月25日 中日新聞



は常時流す毎秒〇・七リットルと、ひどい濁水時には別に毎秒四リットルも導水路から放流する。この水は長良川の中流域の

支流の板屋川、伊自良川、鳥羽川を通すと、長良川に合流する地点は鶴飼いの漁場より下流になる。中部地整は「鶴飼いの影響や市街地区間で放流される」と清流のイメージを損なうなどの意見を参考にしたと説明した。

計画では、長良川に水量を増やすのが目的で、放流場所は千鳥橋、鶴飼大橋間が有力視されている。

連絡導水路は上流、下流の二本あり、上流側は同県揖斐町の西平ダム上流から長良川を経て同県坂祝町の木曾川を結ぶ四十三キロの地下トンネル。本年度に着工を予定している。

徳山ダムは同日朝、延期されていた試験放流を始めた。

「再検討を求めろ」

徳山ダム 導水路計画 反対の市民らが

徳山ダムの水を木曾川と長良川へ放流する導水路計画に反対する市民らでつくる「長良川に徳山ダムの水は要らない」市民学習会（代表・粕谷志郎岐阜大教授）は9日、「導水路計画の再検討を求め、長良川を守ってほしい」と呼びかける声明を出した。声明では、長良川鶴飼が行われる場所のすぐ上流から、冷たくて藻類が繁殖した徳山ダ

【鈴木敬子】
08年5月10日 毎日新聞

新聞記事から拾う声として「導水路の事は今日初めて聞いた。きれいな水と犬山城あつての観光地。水質に影響が出るようなら困りますね※1」、「今は問題が無いのに、状態を変えれば生き物にいいことはない※2」との声が上がっている。

徳山ダムをはじめ、この導水路事業には潜在的ステークホルダーとも言える人々が多数存在する。まずは何が問題かを知る事が大切だと思います。私たち自身が当事者、即ち地域に根ざした生活者とならなければ実感も湧かないし、この複雑怪奇な事業へ個々が感じる思いの先鋭化もなされない。その為に、まず知ることからはじめませんか？

※1 愛知県犬山市観光協会職員、後藤氏

※2 岐阜県羽島市・川漁師、大橋氏 共に8年5月6日中日新聞

徳山ダム稼働 旧村民複雑

「愛着消えぬ」「下流の役に」

一つの村を丸ごとのみ込んだ「徳山ダム」(岐阜県揖斐川町)が五日、本格稼働した。大型連休中とあって千人以上の観光客が訪れ、感嘆に見とれた。町は「日本のダム」を観光の目玉にしようとする。だが、故郷を失った旧徳山村民の胸中には複雑な思いがよぎる。

小西政治郎さん(68)「同県本巣市長屋」は昨年まで旧徳山村近くの山に山菜採りに出掛けたが、今年に行っていない。「アザミやセンマイ、フキなど山菜の宝庫だった山は沈んでしまった。当時を思い出すと懐かしくて涙が出る」からだ。

同市文殊の北村光春さん(65)は「集落が沈み始めたときは寂しか

観光客1000人、町は「目玉に」

ったが、今は吹っ切れた」と話し「治水などの面で下流の人に役に立つダムになってほしい」と願う。

しかし、文殊地区では地盤沈下で全八十三戸の約三分の二が再移転を余儀なくされた。北川誠さん(70)は「とてもダム完成を喜ぶ気になれない。ここを新たな古里にして生活再建をしようと思っただ」と表情を曇らせてる。

廃村から二十年以上。「徳山問題」の風化を懸念する広瀬静雄さん(70)「本巣市長屋」は「若い世代には湖の下に集落があったという強い郷愁はない。村はなくなっても愛着までなくしてはならない」と語る。

08年5月6日 中日新聞

アユ遡上確認できず

徳山ダム下流 放流影響か

試験放流中の徳山ダム(岐阜県揖斐川町)を管理する揖斐川中部漁協(揖斐川町)五日も三、四度低下していた。試験放流完了後の回復状況を見守りた

試験放流が始まる前日の四月二十二日には、三放流はみている。同漁協の昨年の漁獲量は約四百匹を記録したが、放流翌日から五月二日まで一匹も確認できなかった。アユの放流は数日中にも終わる。同機構徳山ダムは、試験放流の主体の水質源機構によると、試験放流は数日中にも終わる。同機構徳山ダムは、試験放流の主体の水質源機構によると、試験放流は数日中にも終わる。

調査したのは、ダムから下流二十、五十、一が五十、六十、増え、石原潤一郎組合長

試験放流では、最大毎秒二百トを揖斐川に流す。揖斐川の水位遅らせ、五月中旬に実施することを決めてい

試験放流の主体の水質源機構によると、試験放流は数日中にも終わる。同機構徳山ダムは、試験放流の主体の水質源機構によると、試験放流は数日中にも終わる。

6月3日時点では、徳山ダムの利用はなされておらず、取水施設や発電施設も建設されていない。

このように現時点では「徳山ダム」は完成していると見られるが、故郷を奪われたと邪推してしまふ。旧徳山村民の生活を知らなければ知るを得ず、人為的災害と言わざるを得ず。公式見解である「移転補償が終わった」と言えるか疑問が残る。

気がつかぬ間に、夏が終わり先が見えない冬が続く。大きな過ちは気がつくのが難しい。また、それを修正するのは困難である。しかし難しいからと言って諦めてよいのか。

08年5月3日 中日新聞

内ヶ谷ダム(郡上市)の工事が進む

岐阜県民の心の川、長良川に河口堰とセットで二つの治水ダムが計画されました。

ひとつは白鳥の阿多岐ダムで、これはすでに完成しています。もうひとつは岐阜県が1983年に着手した支川、亀尾島川の上流の郡上市大和町地内の内ヶ谷ダムです。高さ82m、長さ270mの重量式コンクリートダムで、総貯水量1150万 m^3 、有効貯水量910万 m^3 、ダム地点の計画水量は毎秒880 m^3 のうち690 m^3 の洪水調整を行う。総事業費340億円、2019年の完成をめざしています。

「長良川水系・水を守る会」の亀崎敬介さん、「板取 自然探索・山童」の長屋泰郎さん、丈一郎さん、「河口堰建設に反対する会」の高木久司さん他12名でダム予定地を見てきました。すでに取り付け道路の工事が進んでいます。

利水でも多目的でもダムをつくる理由が見つからない国と県は治水ダムに標的を絞りました。人の命と財産を守るといえば聞こえがいいからです。内ヶ谷ダムも治水



取り付け道路の工事現場

目的の穴あきダムです。通常はダムの下部から水を流し、流出量より流入量が増えた分を溜め、最後は上から放出するという仕組みです。巨額の税金を使い、自然を破壊してまでやる効果はありません。

それよりも土砂の堆積や貯水量が常に変わるため、斜面の崩壊が進むなど治水に名を借りた自然と環境を破壊

するダムです。河川官僚はこの内ヶ谷でもこう発言をしています。

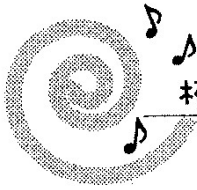
「内ヶ谷ダムの取水面積（40平方 km ）は上流域全体の僅かで、治水効果をあまり期待されても困る」……

黙っていると工事はドンドン進みます。不要で自然を破壊する内ヶ谷ダムの建設に、連帯してストップをかけましょう。

長良川をまもり隊 粕谷豊樹



◀ダムサイト予定地



校歌に歌われた長良川②

長良小学校

作詞／足立徹美

ぼくらの笑顔が 長良の川に
 楽しくうつり しぶきがはねる
 あふれる光を からだにうけて
 大きな夢を育てよう
 ぼくも わたしも あなたも 君も
 みんな土の子 光の子

長良西小学校

作詞／校歌制定委員会

長良の川の 澄んだ水
 小さい川を いくすじも
 ゆたかにあつめ 流れゆく
 長良西の子 わたしたち
 なかよく進もう 腕くんで

長良東小学校

清き流れの 長良川
 りりしく泳ぐ 鮎の子が
 こころやさしく 寄せ合つて
 みがかいのちに 光りあり
 長良東小学校 たくましく育つ

事務局より

3月23日の市民学習会で、山内克典先生が講演の最後に読まれた自作の「ヤマトシジミからのメッセージ」は参加者に大きな感動を与えました。山内先生は一般市民も参加した「長良川下流域生物相調査団の団長として約20年間、長良川をずっと見続けて来られました。このメッセージは、なんとか長良川を守りたい、という私たちの想いでもあります。

「ヤマトシジミからのメッセージ」

◆長良川河口堰を作り

私たちが死に追いやった人たちが
 今度は私たちを助けるという名目で

導水路を建設しようとしているとは…

心底、不条理の極みだと思えます。

◆私たちのことを真に思うなら

河口堰のゲートを開けてください。

そうすれば

私たちは長良川で直ちに復活します。

◆河川環境の改善というのなら

河口堰のゲートを開けてください。

ヨシ原も、トビウオも、ベンケイガニも

イトメも、多くの仲間が復活します。

アユもサツキマスも

昔の元気を取り戻します。

感潮域・汽水域の生態系が

見事に復活します。

発行：長良川市民学習会（「長良川に徳山ダムの水はいらない」市民学習会実行委員会）

代表：粕谷志郎／岐阜大学教授

連絡先：武藤 仁／090-1284-1298 〒500-8211 岐阜市日野東7-11-1

HP:<http://blog.goo.ne.jp/dousui/>

●私たちの運動はみなさんのカンパで成り立っています。賛同してくださる方はぜひカンパをお願いします。

郵便局口座番号：00880-7-88259 粕谷志郎宛